

【特別寄稿】

アルジェのジャーナリスト、アルベール・カミュ

放送大学名誉教授 柏倉康夫

Received: 2019. 12. 16

Maria Santos-Sainz : Journaliste, Albert Camus (Édition pogée, 2019. マリア・サントス＝サインス著『ジャーナリスト、アルベール・カミュ』、未訳) が、2019 年 5 月に刊行された。小説『異邦人 (L'Étranger)』を書いて一躍世界中に知られるようになる前の、ジャーナリストだったカミュの活動を掘り起こした労作である。著者のサントス＝サインスは、情報学博士で、ボルドー・モンテーニュ大学ジャーナリズム研究所の講座責任者をつとめている。

カミュが新聞「アルジェ・レピュブリカン (Alger républicain 共和派アルジェ)」や、「コンバ (Combat 闘争)」に書いた記事は、これまでに、『アルベール・カミュ、ノート 3 (Cahiers Albert Camus 3, Gallimard, 1978)』や『新版アルベール・カミュ全集 第 IV 巻 プレイアード叢書 (Albert Camus: Œuvres Complètes, tome IV, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2008)』に収録されていて読むことができるが、サントス＝サインスは、本書でジャーナリストとしてのカミュの仕事を詳細にたどり、その特徴を明らかにした。以下、この新刊書を参考にしつつ、アルジェ時代のジャーナリスト、カミュの一面を描いてみたい。なお、本稿における訳や注は、筆者によるものである。

1. 生い立ち

アルベール・カミュは 1913 年 11 月 7 日、北アフリカのフランス領植民地アルジェリアのモンドヴィで生まれた。父リュシアンは南フランス・ボルドーからの植民者で、ブドウ園の農業労働者（樽造りに従事していたといわれる）、母のカトリーヌ・サンエスはスペインからの植民者の娘だった。

1914 年 7 月、第一次大戦が勃発すると父は徴兵され、2 カ月後の 9 月、「マルヌの会戦」で頭に銃弾を受け、1 週間後の 9 月 14 日に病院で亡くなった。カミュは 1 歳だった。

その後母と子はアルジェ郊外の母方の家に移り住んだ。そこはベルクールという貧しい地区で、2 人の叔父も同居していた。母は耳が不自由なため沈黙しがちで、家族間の会話はスペインのカアルニア語が混じる方言だった。家には 1 冊の本もなく、カミュが正式なフランス語を修得したのは小学校に入ってからである。

少年のカミュが熱中したのはサッカーだった。生活は貧しかったが、フランス人、アルジェリア人（アラブ人）を問わず大勢の仲間ができた。

こうした家庭事情から小学校卒業後は仕事につくつもりだった。だが彼の能力を見抜いた担任のルイス・ジェルマンが祖母と母を説得し、奨学金を受けられるようにしてくれた

お陰で、ビジョー高等中学校へ進学することができた。ただ奨学金からは学費を出すのがやっとで、夏休みには金物工場や船の荷揚げの手伝いなどの仕事に精をだした。

カミュの運命を決めたのは高校2年生、17歳のときに、高校で哲学を教えていたジャン・グルニエと出会ったことである。グルニエはカミュの才能を認め、文章を書くことを勧めた。カミュの方でも、グルニエが出した『孤島 (Les Iles)』を読んで感銘を受け、自分も文章を書きたいと思うようになった。

サントス＝サインスも引用しているが、遺作となった『最初の人間 (Le Premier Homme)』で、カミュはグルニエについて、「ぼくはとても若く、とても愚かで、とても孤独だった (アルジェでのことを覚えておいででしょう?)。あなたはぼくにむきあってくれ、僕がこの世で愛しているすべての扉を開いてくれました。」¹⁾と書いている。

1932年に、グルニエは学生たちの課題論文と卒業論文をまとめて、雑誌「シュッド (Sud、南)」の特集号として出版したが、そこにはカミュのベルクソン論も掲載された。こうした経緯を経て、カミュはこの年、19歳でバカロレア (大学入学資格試験) に合格し、アルジェ大学文学部の哲学科に進学した。残念だったのはこのころ結核を発症して、大好きなサッカーを断念しなければならなかったことである。

カミュは1932年～33年の学期に、3篇の論文を「アルジェの学生」誌に発表した。2篇は音楽に関するもの、もう1篇は友人の詩人を論じたものだった。

1934年6月、カミュは眼科医の娘のシモーヌ・イエと学生結婚し (この結婚は2年後には破局する)、翌1935年には、グルニエに勧められて共産党に入党し、党の文化活動の一環として劇団「労働座」の創設にかかわった。カミュはヨーロッパ全体を巻き込むことになったスペイン内戦をテーマにした「アストゥリアスの叛乱」を仲間と創作して演出し、役者としても舞台に立った。しかし、間もなく党幹部とアラブ人活動家の板ばさみになり、最終的には共産党から除名されてしまう。

カミュは、こうした政治活動の一方、6月には「キリスト教形而上学とネオプラトニズム」と題する論文を大学に提出して学位を取得した。

2. ジャーナリズムの世界へ

教職に就くことを希望していたカミュに当局が提示したのは、シディ・ベル・アッベスの高校教師の職だった。シディ・ベル・アッベスは、アルジェリア第二の都市オランの南80キロに位置する農産物の集散地で、歴史も古い街だが、カミュは赴任して間もなく辞めてしまった。仕事がきつい割には給料が安く、条件が同級生たちと比べて極端に悪かったからである。

アルジェに戻ったカミュは著作に専念し、1937年5月には最初のエッセー集『裏と表 (L'Envers et L'Endroit)』を、友人のエドモン・シャルロが立ち上げた「真の富 (Les Vraies Richesses)」書店から出版した。しかし大して評判にもならず、12月からはアルジェ大学附属の地球物理学研究所でデータ整理の仕事の口にありついたが、およそ場違いな職場だった。

カミュが10歳年上の作家でジャーナリスト、パスカル・ピア（Pascal Pia、本名はピエール・デュラン）と出会い、新聞記者になることを打診されたのは翌1938年9月のことである。

当時アルジェリアの主な新聞としては、右翼陣営に属す「ル・デペッシュ・アルジェリエンヌ（Le Dépêche algérienne、アルジェリア通信）」、急進社会党系だが実際は入植者の利益を反映する保守派の「レコ・ダルジェ（L'Echo d'Alger、アルジェ情報）」があり、1935年6月に成立したレオン・ブルムの人民戦線内閣の主張に同調するものとしては、オランで発行されていた「オラン・レピュブリカン（Oran Républicain、オラン共和派）」があった。

首都のアルジェでも、本国フランスや世界の動向について、社会主義の立場に立つ日刊紙を創刊しようという動きが起こり、著名な美術史家エリー・フォールの息子で農業技師のジャン＝ピエール・フォールと書籍販売会社経営のポール・シュミットが中心となって出資者を募った。

資金的な目途がつくと、今度は編集長を誰に依頼するかである。フォールは首相レオン・ブルムのかつての協力者ジョルジュ・ボリスの推薦をうけて、パリで発行されている共産党系の新聞「ス・ソワール（Ce Soir、今夕）」で、詩人のルイ・アラゴン、社会学者のジャン＝ピエール・ブロックと共に共同編集長をつとめるパスカル・ピアに打診した。この申し出を受け入れたパスカル・ピアは、すぐにパリを発ってアルジェへむかった。

フォールはこれより前にカミュと会って創刊する新聞社で働くことを打診していた。創作に時間を割きたいカミュは、最初のうち乗り気ではなかったが、9月にパスカル・ピアと話し合い、新たに出る新聞でジャーナリストとして働くことにした。月給は2,000フランとカフェの給仕並みの安さだが、カミュとしては午後5時から深夜1時まで新聞の仕事をして、午前中は眠り、午後には少し自分の時間が持てるという目算だった。

新聞は8ページ建ての日刊紙で、1部40サンチームで販売された。発行部数は20,000部ほどで、読者の多くは植民者のフランス人だった。40サンチームは現地のアルジェリア人には高すぎたのである。

「アルジェ・レピュブリカン」の第1号は1938年10月6日に発行された。カミュの最初の署名記事が「読書サロン」欄に載ったのは3日後の10月9日で、記事は「オルダス・ハックスリーの新作『マリア・ディ・ヴェッサ』」で、翌10日は「レマルク著『戦友たち』」、11日「ブランシュ・バラン著『日々の活力』」と、本の紹介記事が続き、12日になって、「社会法に対する反論」と題した報道記事を書いた。人民戦線内閣が認めた賃金の引き上げは物価上昇を下まわっており、購買力の増加に少しもつながっていないことを論証した記事だった。

カミュの記事はその後また書評に戻って、20日に「ジャン＝ポール・サルトル『嘔吐』」、23日「ジャン・イティエ『アンドレ・ジッド』」を執筆し、24日には「投票しなかった人たちの視点」を掲載した。創刊から20日弱の間に7本の記事を書いたことになる。

サントス＝サインスは以下のように述べている²⁾。

この新聞はカミュにとってジャーナリズムの学校の役をはたした。彼は「アルジ

エ・レピュブリカン」で、ジャーナリストとしての倫理を鍛えられた。……彼は間もなく裁判担当の記者となり、法廷での実り多い取材体験は、後の文学作品に多くのものをもたらすことになる。

彼は並行して政治問題と社会問題の調査報道にたずさわり、この分野でも大きな成果をあげるようになった。

3. ルポルタージュ

「アルジェ・レピュブリカン」は創刊にあたって、「人民戦線の綱領を支持し」、「原住民の友人たちを劣った地位にとどめる社会的保守主義に反対し」、「出自、宗教、哲学がなんであれ、あらゆるフランス人の社会的平等を即時要求し」、「アルジェリア原住民の政治的平等を目指す」と宣言していた。

新聞が創刊される直前の9月30日、英仏独伊の間で、ズデーテン地方をドイツに割譲することを認めるミュンヘン協定が調印され、これに反対するソビエト連邦や左翼知識人たちの亀裂は一層深まり、戦争への懸念が高まっていた。

「アルジェ・レピュブリカン」は、反ファシズムの立場から国際情勢を報じたが、その他にもスポーツに1ページ、さらに「ベルクールからバーブ・エル＝ウエドまで」と題した地域のニュースに2ページを割いて、植民地アルジェリアが抱える現実を正面から取り上げた。

記者の多くがジャーナリズムの未経験者だったが、編集長のパスカル・ピアはいち早く若いカミュの観察眼と文章力を見抜いた。カミュも精力的に取材活動を行うとともに、1939年5月23日に、前著と同じエドモン・シャルロ書店から2冊目のエッセー集『結婚(Noces)』を出した。90ページほどの本に、「ティパサの結婚」、「ジェミラの風」、「アルジェの夏」、「砂漠」の4篇が収められ、1,225部の限定出版だった。エッセーはどれも地中海地方特有の大地、輝く太陽、青い空、吹き渡る風、芳香を放つ色とりどりの花……こうした世界の美しさを肌で感じ、今この時を生きることへの讃歌だった。

『結婚』が陽の目を見た2日後、パスカル・ピアは、記者証を手にしてまだ1年8カ月にしかないカミュを、北部のカリビア(La Kalybie)地方の取材に向かわせた。ライバル紙の「レコ・ダルジェ」が、「カリビア地方は楽園である」といった記事を載せたが、ベルベル人が多く住むこの地域の生活について、実態に即したルポルタージュをカミュに期待したのである。

アラビア語もベルベル語も話せなかったカミュは、通訳を伴って現地に入り、人びとから直接話を聞いた。その成果は、「カリビアの悲惨」と題した長文のルポルタージュとして、6月5日から15日まで11回にわたって掲載された³⁾。

6月5日の「ぼろ着のギリシア」と副題された第1回は、次のように書き出される。

カリビアの傾斜地にさしかかり、天然の段丘のまわりにかたまる集落、白い羊毛を巻いた人たち、そしてオリーブとイチジクとサボテンの並木道を眺め、そのあと

で人と土地が調和したような単純な生活と風景を目にすると、人はギリシアを想わずにはいられない。

ジャーナリスト、カミュは、『結婚』の一節のような筆致でルポルタージュをはじめるが、一見のどかな光景の裏に恐るべき貧困が隠れていた。

カリビアの悲惨さの全体像を描く前に、さらにこの期間訪ね歩いた飢餓の道程をたどり直す前に、この悲惨さの経済的原因について少し語っておきたい。それらはすべて一本の線につながっている。カリビアは人口過剰の土地であり、生産する以上のものを消費している。山岳地帯の麓々が大勢の人間を抱え込んでいる。たとえばジュルジュラのような地域では、1キロ四方に 247 人がひしめいているが、ヨーロッパのどんな国にもこんな人口過密なところはない。フランスの 1 キロ四方の平均人口は 71 人である。他方、カリビアの人たちは雑穀類、小麦、大麦、モロコシをクレープやクスクスとして消費する。ところがカリビアの土地は穀類をほとんど産しないし、全生産は消費量の 8 割にしか達しない。だから生きていくために必要な穀物を購入しなくてはならないが、工業がほとんどゼロの〔収入のない〕土地では、副食用の農産物でそれを補うしかない。

カリビアはとくに樹木栽培が盛んな土地である。二大産物はイチジクとオリーブで、多くの地方でイチジクは消費量をほぼまかなえている。オリーブに関しては、年によって作、不作の差が激しい。この飢えた人たちに必要な穀物と、生産の現状をどうやったら均衡させることができるのか？⁴⁾（〔 〕内筆者、以下同様）

カミュはカリビアの各地をまわり、通訳を介して人びとから生活の実態を聞き出す。

農業労働者は 1 日分の食料として、大麦でつくったクレープ 4 分の 1 と、小瓶 1 本の油をもっていく。家族の食料は根と草で、それに何時間も煮たイラクサが貧しい人たちの副食となる。⁵⁾

カリビアの労働条件は奴隷のそれだと言わざるをえない。なぜなら 6 ないし 10 フランの賃金を得るのに、10 時間から 12 時間働く労働者たちの労働形態を指すのに、奴隷制以外の言葉を、わたしは知らない。⁶⁾

彼らはどんなことにも適応できるなどと言うことほど恥ずべきことはない。はたしてアルベール・ルブラン氏〔当時の大統領〕は、生きるために 1 カ月 200 フランをあたえられ、橋の下で生活し、汚物にまみれ、ごみ箱から見つけたパンの耳で生きていくことに適応できるのだろうか。彼らは、わたしたちと同じ要求を持つべきではないなど言うのは恥ずべきことだ。⁷⁾

労働者は1カ月に25日働いても150フランしか得られず、それで子沢山の一家を30日間食べさせなくてはならない。これは怒りの限界を越えている。ただ、わたしとしては、読者のうちの何人が、これで生きていけるのかと問いかけるにとどめよう。⁸⁾

カミュが見たのは、飢えで死んでいく人たちだった。当局が配給する小麦や大麦の粉は、人びとが必要とする量にはまったく足りなかった。だがカミュは早急な断定を保留する。

しかしわたしに、この事実が彼らを死にいたらしめるかどうかは分らない・・・・・・問題は、わたしたちが、3世紀も遅れている人たちと共に生活しているという事実だ。そしてわたしたちだけが、この驚くべきギャップに不感症だということだ。⁹⁾

カリビア地方で不足しているのは食料だけではなかった。学校の数が極端に少なく、その質もきわめて不十分だった。カミュは11回の連載を締めくくるにあたって次のように書く。

これで十分ではないのか？ 自分のノートを見ると、胸をムカつかせる事実が、この2倍は見つかる。そしてそれを読者の皆に知ってもらうことに絶望する。だがそのすべてを伝えなくてはならない。わたしは飢えと苦悩に苛まれている人びとの間をめぐる取材をここで終える。読者は、この地では悲惨が決まり文句でも、単なる考察の対象でもないことを理解してくれたと思う。ここには悲惨がある。それは叫び声をあげ、絶望している。もう一度言う。わたしたちはこれに対して何をしてきたか？ これに背を向ける権利が、わたしたちにあるのか？¹⁰⁾

サントス＝サインスによると、カミュの記事の反響はすぐにあった。3日後、保守派の「ラ・デペッシュ・アルジェリアンヌ」の編集長ロジェ・フリゾン＝ロッシュは、「カビリア 39」と題した連載を開始した。

「フランスはカリビアのためによいことを沢山してきた」と書き、カミュを「イデオロギーで目が眩んでいる」と非難した。フリゾン＝ロッシュは、首都アルジェの市長ロジスの取り巻きの一人だった。

残念なことに、カミュの優れたルポルタージュによって、読者が増えることはなかった。現地の人びとの多くは新聞を読む習慣がなかった。そして読むにしても、自分たちに好意的な「アルジェ・レピュブリカン」ではなく、保守系の「ラ・デペッシュ・アルジェリアンヌ」だった。

4. 廃刊

ヨーロッパの情勢は緊迫していた。1939年8月23日、ドイツとソ連は不可侵条約を締結、共産党だけでなく左翼の人びとを混乱と絶望に陥れた。ヒトラーはこれを機に一層攻勢を強めた。パリでは共産党系の日刊紙、「ユマニテ（L' Humanité）」と「ル・ソワール」が押収された。8月26日にはベルギーで総動員令が発動され、戦争の危機が迫った。

1939年9月1日、ドイツは陸軍と空軍とでポーランドに侵攻し、同じ日、イギリスとフランスは総動員令を発動した。3日には両国がドイツに宣戦を布告して第二次世界大戦がはじまった。

レオン・ブルムのあとを継いだダラディエの内閣は、9月29日に共産党と地域政党「アルジェリア人民党（Parti du peuple algérien, PPA）」を非合法化し、両党の幹部を逮捕拘禁してメンバーを監視下に置いた。そして検閲制度を復活させ、新聞記事も愛国的な論調以外のものはすべて検閲された。新聞はしばしば紙面の一部が白紙のまま発行され、あるいは発行停止の処分をうけた。

「アルジェ・レピュブリカン」も時勢に逆らうことはできなかった。その上ここにいて、ジャン＝ピエール・フォールたち経営陣は、パスカル・ピアやカミュたち編集部が創刊当時の路線を逸脱して、「人民戦線の新聞はアナキストの新聞に変貌してしまった」といって非難した。カミュたちは当局以外に、新聞の上層部とも闘わなければならなかった。やがて来る事態を予想して、パスカル・ピアとカミュは、カミュを編集長とする姉妹紙「ル・ソワール・レピュブリカン（Le Soir Républicain 夕刊共和派）」の発行を決めた。1枚の紙の表裏2面に記事を書いた創刊号は、9月15日、1部40サンチームで発売された。趣意書によれば、公衆は真実の報道に飢えている、そこで新しい日刊紙は午後4時に店頭並び、他紙の誇大宣伝を撃つ、というのであった。

「アルジェ・レピュブリカン」は購読者が激減し、10月28日について休刊に追い込まれた。「ル・ソワール・レピュブリカン」はその後も刊行を続けたが、10月30日の一面には、検閲をうけて真っ白になったページの真ん中に、「「ル・ソワール・レピュブリカン」は他の新聞とは違う、それは読むに値する何かを提供する。」と大文字で印刷されていた。

サントス＝サインスによると、フランスの有力紙「ル・モンド」のジャーナリスト、マーシャ・セリ（Macha Séry）は、2012年に、南仏エクス＝アン＝プロヴァンスにある「海外県に関する国立資料館」で、「自由なジャーナリストの宣言」と題したカミュの署名記事を見つけ出した。これは「ル・ソワール・レピュブリカン」の1939年11月25日号に掲載するために執筆されたが、直前の検閲によって掲載を禁止され、陽の目を見なかったものである。セリはこれを2012年3月17日付の「ル・モンド」紙に発表した。カミュは次のように書いていた。

今日、フランスでの問題は、いかにして新聞の自由を護るかではない。問題はこれらの自由に対する圧力をうけて、一人のジャーナリストがどうしたら自由でいら

れるかを探し求めることである。問題は集団ではなく、個人に関わることなのだ。
……

1939 年にあつて、一人の自由なジャーナリストは、絶望することなく、自らが真実だと思ふことのために戦うのだ。自分の行為が事件の動きに影響をあたえることを信じて。彼は憎しみを助長し、あるいは絶望を生むものは一切書くことはない。こうしたことはすべて彼の力でできるのだ。……

水嵩を増す愚劣さの沼には、何らかの拒否で対抗する必要がある。世の中のすべての強制は、不誠実を受け入れるいささか清廉すぎる精神にのみ働きかける。

ごく少数の者しか情報のメカニズムを知らず、彼らは簡単にニュースの正当性を信じてしまう。自由なジャーナリストはこの事実こそ注意をむけるべきだ。

独立した新聞は情報の出どころを明かし、公衆がそれを吟味するのを助け、頭の詰め物を取りのけ、罵言を払拭し、解説によって情報が画一化するのを避ける必要がある。要はジャーナリストの力によって、真実を人間的尺度に還元するのである。

これこそが世の中に嘘がはびこるのを拒否するのに役立つのだ。¹¹⁾

カミュはジャーナリズムに高い理想を託したが、現実はこれとは裏腹だった。「アルジェ・レピュブリカン」の休刊とともに多くの記者が解雇され、「ル・ソワール・レピュブリカン」のつくり手は、カミュとパスカル・ピア以外に 14 名だけというありさまだった。その上、アルジェは情報源に遠く、情報は契約しているアジャンス・ラジオ（ラジオ通信）に頼るしかなく、ときに政府発表の誤った情報を載せざるを得ないこともあった。

1940 年 1 月 9 日、アルジェ総督は新聞の発行を差し止める法令を發布した。翌 10 日の夕方、警察は「ル・ソワール・レピュブリカン」社内で、予約購読者宛てに発送される新聞 110 部を押収し、駅の新聞スタンドやタバコ屋の店頭から合計 1,051 部を回収した。

パスカル・ピアとカミュは後始末に追われた。職を失った記者や印刷工などへの給料の清算を終えると、パスカル・ピアは妻と娘、それに義母を連れて、2 月 8 日に船でアルジェをあとにした。パリに戻った彼は、「パリ・ソワール (Paris-Soir)」紙の編集長に迎えられ、カミュのために編集部での仕事を見つけてくれた。カミュがパリに行ったのは 3 月 23 日のことである。ただ、カミュの仕事は編集秘書としての編集作業への助言が主で、彼自身が記事を書くことはなかった。

1940 年 6 月 17 日、パリはドイツ軍によって占領された。このため「パリ・ソワール」は自由地区のクレルモン＝フェラン、次いでリヨンへと本拠を移し、カミュもこれに従った。12 月には、オラン出身の数学者で、ピアニストのフランシヌ・フォールと再婚したが、新聞社では物資の不足と購読者の減少から人員整理が行われ、カミュは感謝しつつ退職の道を選んだ。

その後、彼はオランの妻の実家に身を寄せ、私立中学校でフランス語を教えるとともに、公教育から排除されたユダヤ人学生のために哲学の授業を受け持った。そしてこの間も、小説「異邦人 (L'Étranger)」、評論「シシュポスの神話 (Le Mythe de Sisyphe)」、戯曲「カリギュラ (Caligula)」の創作を進めた。

「異邦人」がパリの老舗ガリマール社から出版され、文学界にセンセーションを巻き起こしたのは1942年5月のことである。このときガリマール社の査読委員であるアンドレ・マルロー、ジャン・ポーラン、ロジェ・マルタン・デュ・ガルに原稿を読むように紹介してくれたのもパスカル・ピアだった。

こうして一躍有名になったカミュは、レジスタンの一環として非合法誌「コンバ（Combat、戦闘）」の編集にかかわり、逮捕を免れるために、アルベール・マテ（Albert Mathé）などの匿名で記事を書いた。

カミュはジャーナリストの仕事に矜持を抱いていた。アルジェ時代にこんな言葉を残している。

ジャーナリストは言葉の保持者だ。彼はときにこの宝物を用いて、自らの国の名のもとに語る。新聞は一国の言語活動〔ランゲージュ〕なのだ。¹²⁾

カミュは言葉が諸刃の剣であることを十分に自覚していた。その上でジャーナリズムの仕事に矜持を抱いていた。だから彼はジャーナリストとして、人びとの名のもとに語ることを躊躇しなかったのである。

註

- ¹⁾ Albert Camus : Œuvres Complètes, tome IV, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2008. p.758.
- ²⁾ Maria Santos-Sainz : Journaliste, Albert Camus. Édition pogée, 2019. pp.86-87.
- ³⁾ サントス＝サインズは同書巻末のクロノロジーで、掲載の日付を7月としているが6月の誤りである。ただし本文では正しく6月と記されている。
- ⁴⁾ Albert Camus : Essai, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1972. p.905.
- ⁵⁾ Albert Camus : Œuvres Complètes, tome IV, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2008. p.313.
- ⁶⁾ ibid. p.316.
- ⁷⁾ ibid. p.315.
- ⁸⁾ ibid. p.316.
- ⁹⁾ ibid. p.316.
- ¹⁰⁾ ibid. p.311.
- ¹¹⁾ Maria Santos-Sainz : Journaliste, Albert Camus. Édition pogée, 2019. pp.234-235.
- ¹²⁾ Albert Camus : Œuvres Complètes, tome IV, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2008. p.1336.

